

幼児期における協調運動チェックリストの開発

○古屋友希 久保愛恵 勝二博亮 田原 敬
 (こどもプラス島名教室) (茨城大学大学院教育学研究科) (茨城大学教育学部) (茨城大学教育学部)
 KEY WORDS: 6 歳児 DCD 不器用

(目的)

近年、保育現場をめぐって、「気になる子ども」の存在が取りあげられているが、運動のぎこちなさについては保育上の問題としてほとんど顧みられてこなかった(増田, 2007)。さらに、発達性協調運動障害 (DCD) に関する標準化されたチェックリストは海外で存在するものの、本邦では見当たらず、とりわけ幼児期の行動に焦点をあてたものはない。

そこで、本研究では就学前の 5~6 歳の子どもを対象とした協調運動能力を測る質問紙を開発することを目的とする。さらに、海外で標準化されている M-ABC2 の実技検査もあわせて実施し、作成した質問紙の妥当性を検討した。

(方法)

(1)質問紙調査: ①対象者: A 幼稚園の年中および年長クラスに在籍する園児 74 名(男児: 27 名, 女児: 47 名)の保護者。②調査内容: 発達検査等の運動に関する項目や、幼児期の運動能力に関する先行研究を参考に、4~5 歳程度で達成可能と考えられる 30 の質問項目について 4 段階評価からなる質問紙を作成し配布した。③分析: 運動に困難さがあるほど点数が低くなるよう 4 段階評価を得点化し、最尤法-プロマックス回転による因子分析を実施した。さらに、因子ごとの年齢群間差には *t* 検定を行った。

(2)M-ABC2 実技検査: ①対象児: 質問紙の回答結果から総評価値が均等にばらつくよう抽出された園児 40 名(男児: 20 名, 女児: 20 名, 5 歳児群: 5.49±0.26 歳, 6 歳児群: 6.39±0.20 歳)を対象とした。②手続き: M-ABC2 実技検査の中から 3~6 歳に適用される「手先の器用さ」「ボールスキル」「静的・動的バランス」の 3 領域 8 下位検査を実施した。③分析: 各領域で素点を得点換算尺度により得点化し、それらの年齢群間差については *t* 検定を実施した。

(結果)

(1)質問紙調査

4 歳児や記入不備データを除外した計 56 名を分析対象とした (男児: 20 名, 女児: 36 名, 5 歳児群: 5.41±0.26 歳, 6 歳児群: 6.36±0.18 歳)。予備分析で質問紙の 11 項目が取り除かれ、計 19 項目が分析対象となった。因子分析の結果、「保育場面における印象評定要因」「ボール運動/リズム運動要因」「微細運動/移動運動要因」の 3 因子が抽出された。総合得点および各因子での得点を年齢群ごとに算出し、*t* 検定もしくはウェルチ検定を行った結果、「総合得点」と「ボ

ール運動/リズム運動要因」において、5 歳児群に比べ 6 歳児群で有意に高かった(総合得点: $t(54)=2.882, p=.006$, ボール運動/リズム運動要因: $t(54)=4.115, p=.000$)。

(2)質問紙得点と実技検査得点の関連

質問紙と M-ABC2 実技検査の総合得点を用いて、ピアソンの積率相関係数を算出したところ、5 歳児群では相関が認められなかったのに対して($r=.333, p=.151$), 6 歳児群では有意な強い正の相関が認められた($r=.839, p=.000$; 図 1)。そこで、6 歳児群のデータに関して質問紙の総合得点を従属変数、実技検査の 3 領域の得点を独立変数とした強制投入法による重回帰分析を行ったところ、標準偏回帰係数が有意もしくは有意傾向を示したのは「手先の器用さ」領域($\beta=.479, p=.023$)と「静的・動的バランス」領域($\beta=.400, p=.059$)であり、両者には有意な正の相関も認められた($r=.716, p=.000$)。なお、このときの回帰式全体の説明率は $R^2=.718$ で有意であった($F(3, 16)=13.592, p=.000$)。この結果を基に作成したパス図を図 2 に示す。

(考察)

(1)質問紙調査の年齢妥当性

因子分析により残された 19 の質問項目に関して、総合得点は 5 歳児群よりも 6 歳児群で有意に高かったことから、運動能力の発達の側面が総合得点として表れる質問紙となっていたことが示唆された。さらに、M-ABC2 の実技検査による総合得点との関連では、6 歳児群においてのみ正の相関が認められたことから、質問紙調査の内容が 6 歳児相当の運動能力を測るのに適していたことが示唆された。

(2)質問紙得点と実技検査得点の関連

前述のように、質問紙得点と実技検査得点を用いた相関分析では、質問紙は 6 歳児を対象に用いることが有効であることが示唆された。そこで、6 歳児群において質問紙の総合得点を従属変数とした重回帰分析を行った結果、実技検査の「手先の器用さ」領域は質問紙の総合得点に最も影響力をもつことが明らかとなった。この点に関して、渋谷(2010)は保育者による幼児の不器用さに関する印象評定と M-ABC2 との関連について検討しており、印象評定には「手先の器用さ」領域の結果が影響力をもつことを報告している。手先の器用さにおいては、不器用さの核となる重要な現象として考えられていることから(Jongmans et al., 2003), 本研究で開発した質問紙は 6 歳児の協調運動能力を測るものとして一定の妥当性があるものと示唆された。

(FURUYA Yuki, KUBO Manae, SHOJI Hiroaki, TABARU Kei)

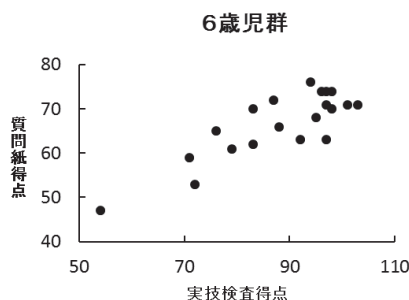
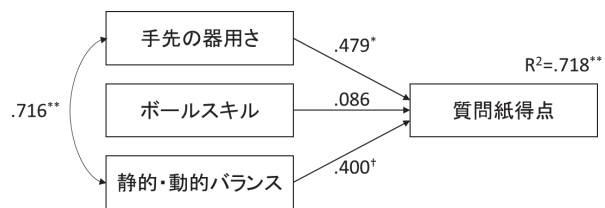


図 1 質問紙得点と実技検査得点の相関 (6 歳児群)



** $p<.01$ * $p<.05$ † $p<.1$

図 2 質問紙得点を規定する実技検査 3 領域のパス図